

氏名（本籍）	横溝 賢（埼玉県）
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	乙第80号
学位授与の日付	平成29年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	地域志向のプロジェクティスタ育成メソッドの研究
論文審査委員	(主査) 教授 長尾 徹 (副査) 教授 赤澤 智津子 教授 佐藤 弘喜 教授 白石 光昭 教授 松崎 元

学位論文の要旨

地域志向のプロジェクティスタ育成メソッドの研究

わが国の総人口は2005年の1億2,777万人をピークに減少の一途をたどっており、2050年の総人口は9,515万人になると推計されている。とりわけ地方は人口が減少すると税収減によって生活の利便性が低下し、若者が地域に根付かず、さらなる人口減少が起こると予測されている。このような予測に対し、ゼロ成長社会に適した生活文化を構想実現できる人材を育成すれば、新しい発想の仕組みが生まれ、地域の生活の利便性や魅力も向上することが期待される。本論では、このような現実とユートピアを考慮しながら、社会のあるべき姿を構想実現する能力をプロジェクターレ思考（Progettare Thinking）と呼び、この思考を実践できる人材を育成するための方法論を構築する。

研究の手続きは1章においてプロジェクターレ思考の学びの構成を定義し、2章において主体性を促す内省支援の仕組みを構築し、3章にてコンテキストデザイン手法、4章にて協創デザイン手法、5章にて組織デザイン手法をそれぞれ構築し、6章にて各手法の実践知を体系化し、プロジェクターレ思考の人材育成方法論を構築する。

1章では、プロジェクターレ思考の本来の意味を考察したうえで、この思考に必要とされる資質を「（1）構築力：社会に対する眼差し、ユートピアを構想する力、（2）構築力：無秩序なデータから意味のある価値を構築する力、（3）協創力：学際的な協創により適切な解を見出す力、（4）自律力：自律的に活動を推進する力」の4つに設定した。次にこれらの力を涵養するための学びの構成を「コンテキスト理解：生活世界のコンテキストを理解すること」「実践スキル：状況に応じた構想実現の手法や知識を展開できるスキル」「マインド：ユートピアを志向するた

めの活動意義をもつこと」の3項目に設定し、4つの力の育成要件を整理した。その結果、3章において文化コンテキストを物語る製品デザイン手法の実践によって構築力を涵養し、4章において使用コンテキストの共感価値を創造するデザイン手法の実践によって協創力を涵養し、5章において社会コンテキストの理解からコミュニティの活動をデザインする手法の実践によって自律力を涵養することとし、構想力は各デザイン手法の実践を通して、生活世界のコンテキストの理解を深めることによって涵養することとした。

次に2章では、4つの力に必要とされる育成要件・内省の持続力を涵養するために、ICTを使って経験をリアルタイムで内省できる仕組みーリアルタイムリフレクションRTRを構築した。RTRは、ウェブログを使った内省システムであるが、デザイン活動の各記録に「誰が」「いつ」「どこで」「何を目的に」「どのようなデザイン活動をしたのか」という検索性のタグを付与することで、学習者が自己や他者の活動内容を検索しながら、デザインプロセスの各段階を内省し、グループワークに役立てる仕組みである。この仕組みを、授業に導入した結果、RTRの活用頻度の高かったグループは、専門家による成果物のデザイン評価も高くなる正の相関の傾向が確認された。また相関性の高い上位2グループのうち、一方はグループ内でのアイデアスケッチの比較検証を目的にRTRを活用し、もう一方はデザインの相互評価を目的にRTRを活用しており、RTRによって学習者間の協調的な活動を促すことが確認できた。

3章では、「製品の文化性」を高めることを目的に、伝統工芸の文化コンテキストを使って人工物を形作るためのコンテキストデザイン手法を構築した。この手法を伝統工芸品のパタングラフィクスをデザインする授業にて実践した結果、学習者は地域文化の魅力を再認識し、人工物を通して文化的価値を物語る力を修得することが出来た。

4章では、「集団の協創性」を高めることを目的に、デザイン非専門家の創造的な連帯体験を支援する協創デザイン手法を構築した。このデザイン手法を食品商品開発プログラムにて実践した結果、学習者は商品の企画構想から試作検証、パッケージデザインまで、高い連帯性を持って遂行することが出来た。

5章では、自律的にデザイン活動を行える民間組織の育成を目的に、ワークショップを戦略的に活用した組織デザイン手法を構築した。

このデザイン手法を民間の間伐活動を支援する授業にて実践した結果、学習者は自らが主体となって、林業の魅力を市民と共有するワークショップをステークホルダーとの合意形成を図りながらデザインし、ワークショップの実施まで遂行することができた。

6章では、プロジェクターレ思考の学びの構成要素を学習者が修得できたか考察した。その結果、学習者は、各デザイン手法の実践によって、地域文化や人工物の意味性、集団社会のコンテキストをそれぞれ理解し、コンテキストの洞察から得た構想を実現するための実践スキルを修得し、地域社会と共生しながらデザイン活動を行うマインドを持つことが出来た。最後にこれまでの考察結果をまとめ、プロジェクターレ思考を実践するためのアプローチを体系化し、アプローチ実践による学びのプロセスを明らかにした。

審査結果の要旨

本論文は、現実とユートピアを考慮しながら、社会のあるべき姿を構想実現する人材をプロジェクトイスタ（Progettista）と呼び、その活動の基盤となるプロジェクト思考（Progettare Thinking）を実践するための方法論を纏めたもので、6章で構成されている。

1章では、プロジェクト思考の本来の意味を考察したうえで、この思考に必要とされる資質を「（1）構築力：社会に対する眼差し、ユートピアを構想する力、（2）構築力：無秩序なデータから意味のある価値を構築する力、（3）協創力：学際的な協創により適切な解を見出す力、（4）自律力：全体性を構造化し、自律的に活動を推進する力」の4つに定義している。次にこれらの力を涵養するための学びの構成を「コンテクスト理解：生活世界のコンテクストを理解すること」「実践スキル：状況に応じた構想実現の手法や知識を展開できるスキル」「マインドセット：ユートピアを志向するための活動意義をもつこと」の3項目を設定し、4つの力の育成要件を整理している。

2章では、4つの力に必要とされる育成要件・内省の持続力を涵養するために、ICTを使って経験をリアルタイムで内省できる仕組みーリアルタイムリフレクション RTR を構築している。RTR は、ウェブログを使った内省システムであるが、デザイン活動の各記録に「誰が」「いつ」「どこで」「何を目的に」「どのようなデザイン活動をしたのか」という検索用のタグを付与することで、学習者が自己や他者の活動内容を検索しながら、デザインプロセスの各段階を内省し、グループワークに役立てる仕組みである。この仕組みを、授業に導入した結果、RTR の活用頻度の高かったグループは、専門家による成果物のデザイン評価も高くなる正の相関の傾向が確認された。また相関性の高い上位2グループのうち、一方はグループ内でのアイデアスケッチの比較検証を目的に RTR を活用し、もう一方はデザインの相互評価を目的に RTR を活用しており、RTR によって学習者間の協調的な活動を促すことが確認できたと述べている。

3章では、「製品の文化性」を高めることを目的に、伝統工芸の文化コンテクストを使って人工物を形作るためのコンテクストデザイン手法を構築している。この手法を伝統工芸品のパタングラフィクスをデザインする授業で実践した結果、学習者は地域文化の魅力を再認識し、人工物を通して文化的価値を物語る力を修得することが出来たと述べている。

4章では、「集団の協創性」を高めることを目的に、デザイン非専門家の創造的な連帯体験を支援する協創デザイン手法を構築している。このデザイン手法を食品商品開発プログラムにて実践した結果、学習者は商品の企画構想から試作検証、パッケージデザインまで、高い連帯性を持って遂行することが出来たと述べている。

5章では、自律的にデザイン活動を行える民間組織の育成を目的に、ワークショップを戦略的に活用した組織デザイン手法を構築している。このデザイン手法を、民間の間伐活動を支援する授業にて実践した結果、学習者は自らが主体となって、林業の魅力を市民と共有するワークショップをステークホルダーとの合意形成を図りながらデザインし、ワークショップの実施まで遂行することができた述べている。

6章では、プロジェクターレ思考の学びの構成要素を学習者が修得できたか考察している。その結果、学習者は、各デザイン手法の実践によって、地域文化や人工物の意味性、集団社会のコンテキストをそれぞれ理解し、コンテキストの洞察から得た構想を実現するための実践スキルを修得し、地域社会と共生しながらデザイン活動を行うマインドを持つことが出来たと述べている。最後にこれまでの考察結果をまとめ、プロジェクターレ思考を実践するためのアプローチを体系化し、アプローチ実践による学びのプロセスを明らかにしたと結論を述べている。さらに、本論文を総括し、今後の継続的な研究展開について述べ、終章としている。

以上により、本論文は、地域に根ざした自律的かつ実践的な人材の育成方法を効果的に可能にする手法を示唆したものであり、デザインについて重要な知見を与えたものとして価値ある集積であると認める。

従って、学位申請者の横溝賢は、博士（工学）の学位を得る資格があると認める。